



若者へのメッセージ 46

松竹株式会社 取締役常務執行役員・東京交響楽団 理事長

岡崎 哲也

【第一回】習字がつなぐ歌舞伎との縁

幼少期から歌舞伎や相撲の世界に触れて育った私は、母や叔母と共に「手習い」に励んだ。手習いの先生は、好きなことは一生の財産になると、大好きな歌舞伎の演目を手本に書いて、稽古に身を入れない私を励ましてくださったのだが……

幼少期から歌舞伎や相撲に親しむ

筆で文字を書くのは得意なほうではありませんが、それでも好きです。小さい頃、すばらしい女性の先生が家に来てくださって母や叔母と一緒に習字をしました。当時、六十歳くらいのやさしい方でした。私は長らく歌舞伎の製作の仕事をしてきましたが、幼年からの習字が仕事に深く関わっています。習字のことを昔は「手習い」と言いました。

私は東京の下町、台東区の柳橋の生まれです。

平成のはじめまでは花柳界の盛んな土地でした。芸者さんのほかに日本舞踊家や邦楽の演奏家も住んでいました。料亭の女将さんや芸者衆は歌舞伎の大ファンでしたので、人気俳優もよく柳橋にみえました。お寿司屋さんに、天ぷら屋さん、甘味処、床屋さん、美容院、お医者さん、酒屋さん……コミュニティの皆さんはよく歌舞伎の話をしました。私も幼いときから歌舞伎が好きでした。母や祖母もそうでした。隣町の蔵前には国技館があったので相撲部屋もあり、ある親方のご子息は同級生。相撲と芝居、江戸



岡崎 哲也（おかざき・てつや）

松竹株式会社取締役常務執行役員
東京交響楽団理事長

1961年東京生まれ。83年慶應義塾大学経済学部卒。84年松竹株式会社入社。入社以来、歌舞伎の製作に携わる。2012年取締役。15年常務取締役、19年同最高財務責任者。87年の歌舞伎旧ソウエイト公演以来、フランス、ドイツ、イタリア、アメリカ、韓国、イギリス、モナコ、ルーマニア、中国など海外公演に事務局として参加。2022年より東京交響楽団理事長。ほかに日本演劇協会理事。国立劇場新作歌舞伎募集脚本審査委員。川崎哲男の筆名で歌舞伎・舞踊の脚本を手がけ、2014年『壽三升景清』（松岡亮氏と合作、市川海老蔵Ⅱ現團十郎丈）で第43回大谷竹次郎賞受賞。主な脚本に『西鶴一代女』（4代目中村雀右衛門丈）、『八重二重梅恋衣』（澤村藤十郎、12代目市川團十郎丈）、『藤戸』（中村吉右衛門丈。尾上菊之助丈で再演）、『鴨川をどり』（京都先斗町歌舞会）、『鬼子母の解脱』（西川流名古屋をどり）など。『季刊ステレオサウンド』に2017年よりクラシック音楽のエッセイ「レコーダ芸術を聴く悦楽」を連載中。



六世尾上梅幸



五世中村歌右衛門

時代そのままの空気感でした。小学三年生の頃、先生が綺麗にお手本を書かれるのですが、ちっともうまく書けないので才能がないと諦めかけました。止めなかったのは、お手本に歌舞伎の演目が並んでいたからです。「寺子屋」、「娘道成寺」、「忠臣蔵」……先生もよく考えたのだと思います。好きな歌舞伎の演目を筆で書くのはなかなか楽しい時間になりました。

好きになったものは一生の財産になる

中学二年生のとき友人に誘われて初めてクラシック音楽の演奏会にゆきました。バッハの「フーガの技法」という大曲のオーケストラ版で相当に長大な内容でしたが、とても感動し歌舞伎と同じくらい好きになりました。母にレコードを買ってもらい、歌舞伎以上に熱中し始めま

した。趣味がふえた分、習字の時間が減りはじめ筆遣いまで忘れがちになりました。とうとう先生に「脈がないので、続けても無駄なような気がします」みたいな事を言ってしまった。先生は明治生まれの東京の日本橋の商家のご出身でした。英語にダウンタウンという言葉があります。「下町」というより「繁華な街」というのが本場で、日本橋はもっとも賑やかなダウンタウンでした。商いには出納の書類が必要で昔は筆で書きました。

先生は商家のお嬢様で小さい頃から手習いをし、結婚される頃には師範の資格もお持ちでした。「お習字はうまくなるためにするのじゃありません。筆で字を書くとき心が無心になり、気持ちが落ち着く。真っ白な半紙にゆっくりと書いてください。あなたは歌舞伎がお好きでしょ、若い時に好きになったものは一生の財産になります。お習字も同じです。そう思って書いてくださいね。」へこんでいた私は救われました。まったくその通りで、今でもその言葉を思い出します。

歌舞伎のセリフを毛筆で

高校生になると歌舞伎を研究するというと大袈裟ですが、明治大正時代のフロマイドや雑誌を集めて、演出や記録を読むようになりました。

習字は続けていましたが音楽も聴きたいし生意気盛りです。またまた身が入りません。それを見抜いた先生は、「これなら、お稽古する甲斐があるでしょう……」そうおっしゃると、二枚の手本をお書きになりました。歌舞伎に「暫」という演目があります。元禄時代に初代の市川團十郎が始めた勇壮な「荒事」の芝居です。江戸のスーパーマンが悪人どもをやっつけて弱者を助けるのを観て、観客は大いに沸きました。花道に登場する前に主人公が「しばらく」と声をかけるので「暫」といいます。

時代が下って女方（女性の役を歌舞伎では伝統的な技術で男性が演じます）の「暫」も生まれました。「女暫」といいます。大正時代、東京では五代目中村歌右衛門、六代目尾上梅幸という名優がいて、二人とも「女暫」を演じました。花道で「ツラネ」という自己紹介のセリフがあり、演じる俳優によって内容が異なります。先生はなんと空でその長いセリフを二種類お書きになりました。大正時代の書籍にそのセリフが全部載っていましたが、一字一句違う完璧なものでした。私はびっくりを通りこして驚嘆しました。「さあ、今日から、これをゆっくり書いてください。」おそろしくレベルの高い手本でしたが、筆をもつ時間を作ってゆっくり勉強しよう、私はそう心に誓いました。